

## 更級郡川合新田村 北村家文書

本資料群は、長野市立博物館が平成十四年に長野市内の古書店から購入した資料群である。

北村家文書は古くから知られていたものである。こうしたことから、まずは川合新田村と北村家についての概略を述べておきたい。

川合新田村は北村家が開いた村として伝えられる。北村門之丞は上杉謙信の家臣であった。天正六年（一五七八）、上杉謙信の死後、上杉景勝と上杉景虎との間でおこった御館の乱に際して、門之丞は景虎方に加担し、このために浪人となる。その後高井郡綿内村で蟄居の身となった。その後、川合村の分地を新田開発し人を集め一集落を立てた。これが川合新田村のはじまりである。このため、北村家は「新田大将」と称せられていた。天正十年、上杉景勝が北信濃を手中に治めると姓をそれまでの柴田から北村と改めたという。

川合新田の開発は慶長年間（一五九六―一六一五）に始まったとされる。川合新田村は開発間もない時期から川欠けに悩まされていた。度重なる災害によって、現在、川合新田とよばれている場所に村が移されるのは享保年間（一七一六―一七三六）であるという。

北村家は川合新田村の開発者ということで六十三石の諸役御免が認められた。しかし、享保十八年（一七三三）、六代目の北村祐雪は江戸に出て医者修行をすることになる。このため、北村家に認められていた諸役御免に対する不満の声上がり、安永九年（一七八〇）には、北村家は川合新田村の名主を辞し、その後、名主は村内の持ち回りということになった。

北村家文書の購入の経緯については次のようである。

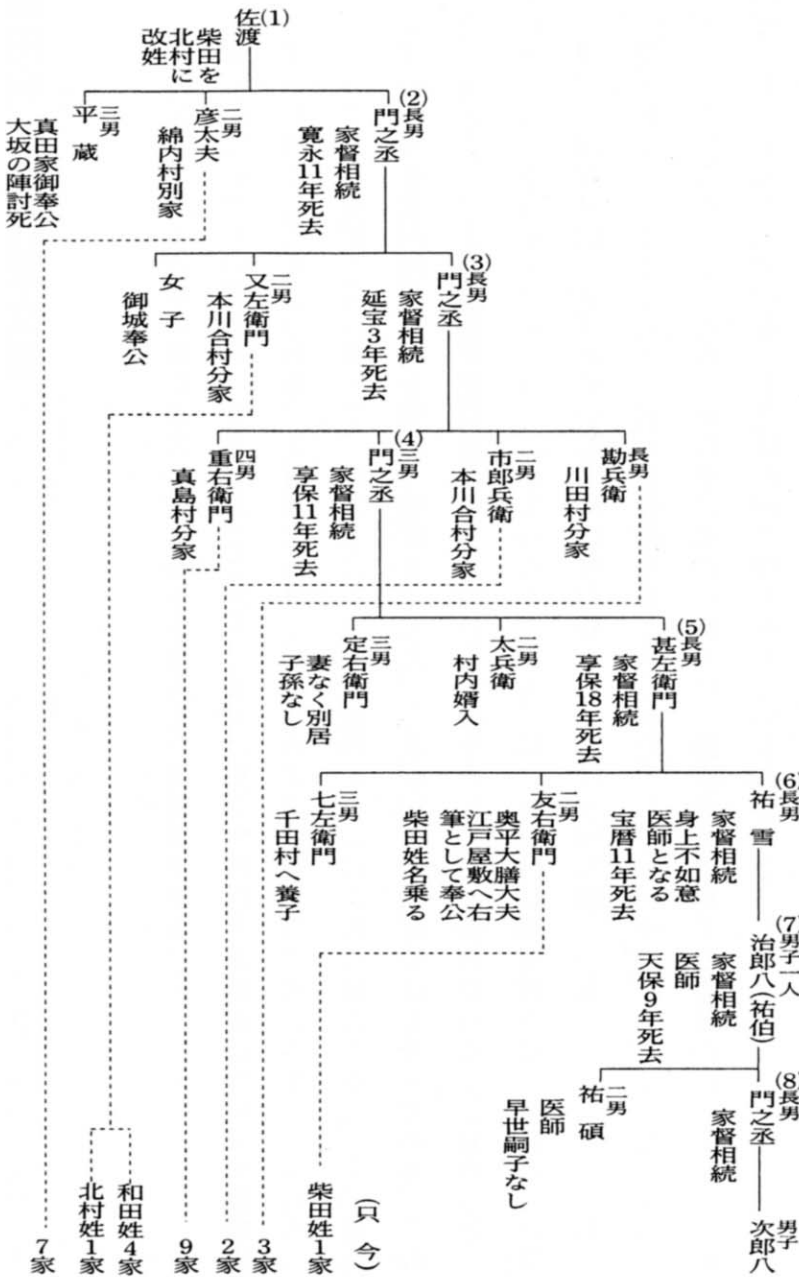
博物館では長野市に関する資料を収集し、展示活動や調査研究に供し、未来の市民につたえる財産として保存している。

かつて長野市川合新田に住んでいた北村門之丞家に関する古文書が博物館に持ち込まれた。この資料は、江戸時代初期の寛永時代（一六二四―一四四）に、北村家の祖先がこの地の開発権を時の領主（真田家）から与えられ、川合村（現在の川合新田）を開くところから、江戸時代の村政に関する古文書（年貢割付、用水普請、村定めなど）、絵図（千曲川災害図、荒地開墾図）、さらに明治時代に郡役所の役を勤めた関係の書類（明治政府よりの御触れ、土地売買、学校建築に関する書類、納税に関する書類）、書画など推定総数一五〇〇点前後の古文書群で、これまで所在不明となっていた文書群である。

江戸初期の古文書は市内でも数少なく、また明治時代にまでわたる文書群は貴重な資料である。加えて、松代藩の村政に関する資料は、今日までに確認されている点数が少ないことから、この一連の文書群の資料的価値はさらに高いと思われる。

最後に、北村家の系譜を掲載しておきたい。

川合新田村北村家の親類（分家）



注：図中( )の数字は北村家当主世代

(先祖より数代始末御書上(北村家文書)により作成)